

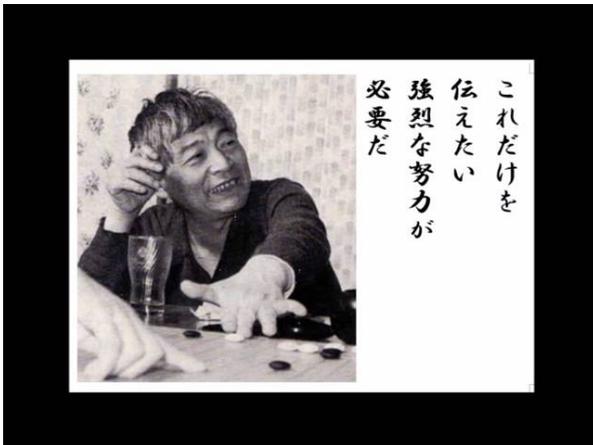
# 秀行と家康

北野寿囲碁同好会 刀根 正樹

「碁は心なり。心正からざれば、碁も正しからず」

藤沢秀行、名誉棋聖の言葉である。無頼派、破滅型棋士といわれた。酒乱、借金王、女たらし。碁だけは、滅法強かった。

「碁の心とは、果たしてなんぞや」と私は、頭を悩ました。どこかに似た言葉があった。  
「剣は心なり。心正しからざれば、剣また正しからず」



剣聖上泉伊勢守は、殺人技の剣法に心を導入した。剣道の誕生である。殺人剣を、活人剣に向上させた。藤沢秀行も剣聖の境地に達したのか。三度のガン闘病を克服した。晩年、秀行塾で、弟子を教えた。「勝負にこだわるな。碁は芸だ。腕を磨け。心を磨け。ふだんの生きざまが大事だ」

真摯な姿勢、生き方をすすめた。破滅型の影は消えた。「技術だけでは勝てない。人間を磨け。心を磨け。真剣勝負は、心乱れれば破れる。心の美しさが全てだ」剣士のごとき言葉である。宮本武蔵も美を求め、絵画や彫刻を残している。

北野市民センターの図書館で、徒然草を読んでいると、第百十一段に、囲碁の批判が書いてあった。「囲碁、双六を好みて、明かし暮らす人は、四重、五逆にもまされる悪事とぞ思ふと、あるひじりの申しし事、耳にとどまりて、いみじくおぼえ侍る」佛語の四重罪とは、殺生、偷盗、邪淫、妄語である。また五逆罪とは、母を殺す、父を殺す、聖者を殺す、僧を仲たがいさせる。仏身から血を出す等である。

徒然草の兼好法師は、囲碁には厳しいことをいったが、一方では艶書の名人である。高師直の恋人、塩治判官の妻に恋文を書き、金をもらった。囲碁をののしった聖人も、また付文の依頼人ではないか。

碁の心には悪が住むのか。織田信長は碁を好んだ。比叡山や伊勢長島を焼打ちにし、多くの僧を殺した。本能寺で名人日海の試合を、酒をのみながら観戦した。不吉な三劫が出現し、明智光秀に殺された。兼好の文章通りの四重五逆ぶりの生涯である。徳川家康はどうであろう。中年になってから、囲碁を覚えた。趣味の少なかった家康は、囲碁に熱中した。家康はあるいは、碁の本質を秀行よりも理解していたのかもしれない。碁を溺愛し、政治に活用し、敵を味方にした。そして心から囲碁に感謝していた。天下をとれたのは、碁から得た知恵と精神修養によるものと悟っていた。

関が原の合戦で悴の秀忠が信州真田城を攻めあぐねて、関が原の戦いに遅れた。家康は、碁を打てと教えた。「大局観がたりぬ。真田城、碁盤の一隅しか見えぬようでは、天下は治められぬ。碁を打ち、心を鍛えよ。読みの力を深めよ」

明治維新を成しとげた大久保利通も、家康と同じ道を歩いた。囲碁が新しい世を開くとはなんとすばらしいことであろう。藤沢秀行名誉棋聖。平成 21 年 5 月、肺炎で没す。NHK の追悼番組に、秀行の辞世の書が踊った。「強烈な努力」 左下側には、「努力」という字が、戦雲の黒龍のように暴れている。そして右の上側に、「強烈」という太く丸い文字が、日食の太陽のごとくゆらめき、強烈なコロナを熱く放っていた。

「これが秀行のいう碁の心なのか。いや秀行の魂そのものかもしれない」と私はつぶやいた。快よい鳥肌が立っていた。

(碁楽連だより 9月号 第217号 平成21年9月1日)